

報 会

道 南

平成12年
新年号

世紀の代わり目を迎えて

道南会長 室 谷 邦 雄

新年お目出度うございます。

本年は二十世紀最後の年であり、来年にかけて千年に一度の世紀の変わり目を迎える年でもあります。人間の歴史の中で二世紀に亘る人生経験を持てる私たちは本当に幸運であると思います。

道南会も本年は数え年で創立四十周年になりますし、昭和十五年に有志で発足した「在京函館会」に遡れば六十年の長きに亘る足跡を残して来たわけです。

道南会発足にあたり、忘れることのできない人として阿部良平さんがおられます。阿部さんは大正六年函中卒業、昭和五十二年に八十八才で逝去されました。

道南会は阿部さんが足を棒にして会員発掘につとめ、学校の名簿などでは拾い得ないような、錚々たる人達を見つけて会員になって貰い、昭和三十五年七月に発足したものです。私の記憶にある当時の著名人の会員には、次の方々がおられますが、みな肩書きを抜きにして「ふるさ

と懐かし」ということで参加して下さいました方々です。

渡邊紳一郎（NHK話の泉回答者）、前田梅松（テレビ解説者）、亀井勝一郎（評論家）、高橋掬一郎（酒は涙かの作家）、高峰秀子（女優）、田辺三重松（洋画家）、金子鷗亭（書家）、梁川剛一（彫刻家）、渡邊忠雄（銀行家）、和田貞一（王子製紙）、山下静一（経済同友会）、田中正巳（代議士）などなどで、現在でも伝統が引継がれ各界の有名な方に道南会員になって頂いていることは有難いことです。

渡邊紳一郎初代会長は「道南会は面影臭いことは一切やらない……昔の故郷の面白い思い出を話し合おう」と語り合う機会を作るのが会の目的であると言っておられます。二代目の和田会長は「老若男女を問わず、誰彼なく話合い、平素出無精な人にも、一度出たら次の会が待遠しくなるような、そんな楽しい会にした

いものだ」と語っておられました。道南会の特徴は肩書きなしで出身地と出身小学校を拠り所としていることで、この伝統は創立以来守り続けられて来ています。新しい世紀を迎えても、この良き伝統を失わないようにしていきたいと思えます。

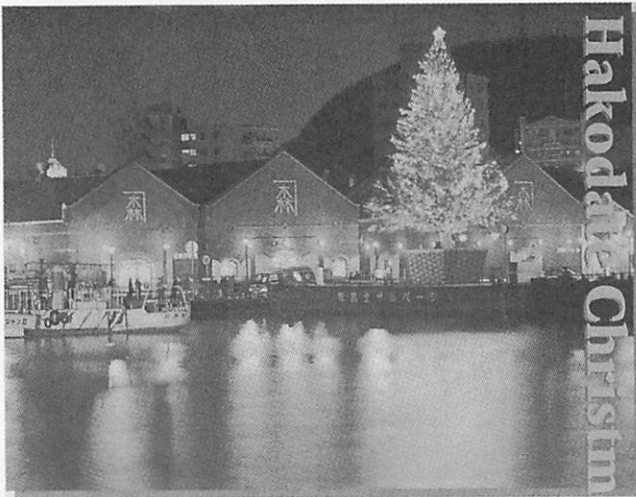
この三年ほど総会や夏季懇親会の例会の他に、ミニ行事として月次行事を開催しています。ハイキング、花見、見学会など季節に応じた企画を立て、毎回二十〜四十名が参加して友好を深め、会員の結束が一段と強固になってきましたが、さらに多くの会員の参加を期待します。

また出身小学校の同窓会も定期的に開かれており、会員も増えて道南会の下支えになっております。今年は函館市東京事務所が開設されて十五周年を迎えますし、道南会四十周年も近づくの機会に、小学校はもとより高等学校同窓会の横の連繋を強め、道南会の充実に努めたいと考えております。その上で、上磯会や松前会とも更に友好を深め、両々相俟って我等の郷里、函館を中心とする道南地方の発展の一大応援団として、力を尽くして行きたいと願うものであります。

☆クリスマスファンタジー☆

冬の函館観光のメインイベントとしてカナダの姉妹都市ハリファックス市から贈られた高さ十八メートルの樅の木が、レンガ倉庫が並ぶベイエリアに立てられ、クリスマスツリーとしてイルミネーションの光に包まれた。

十二月四日の点灯式は午後五時半に行なわれ、花火も打ち上げられた。期間は四日から二十五日まで、毎日午後五時半から十二時まで観光客や市民の目を楽しませた。



赤レンガ倉庫前のクリスマスツリー

GLAYのこと

十一月二十日、第三十二回全日本有線放送大賞の審査結果「Winter、Again」などの爆発的ヒット曲を出したGLAYがグランプリに輝いた。またGLAYは、今年五十回目の節目にあたる大晦日のNHK紅白歌合戦の晴れのステージにも選ばれた。

現在日本のウタの世界で人気ナンバーワンと目しているGLAYの存在を、三年前私は全く知らないでいた。中学生だった孫に「お祖父ちゃん、僕の大好きなGLAYって、函館から出たバンドなんだけど知ってる？」といわれてびっくりしたものだ。孫はお小遣いを貯めて



GLAYと井上函館市長

道南会副会長 能味寿哉

CDを買いイヤホンで楽しんでいたり。そして紅白の初出場が決まった時は「すごいネ」と大喜びであった。

私はGLAY四人組のボーカル・TERUが函商の後輩であることを知って親近感を深めて来た。折よく函商同窓会の会報「五稜ヶ丘・第四十三号」が、彼・小橋照彦君を取り上げてくれた。彼が恩師として敬愛する大角慎治先生が協力されて素晴らしい特集を組んでいる。まずGLAYファンの母校訪問が激増しているという。この夏も山口や関西など道内外

から五十人以上のファンが来校、大角先生の手の空く放課後を待って構内を案内してもらったり、克明な先生手作りのスクラップ帳、アルバムに感動して熱心に質問を繰り返して、去りがたい印象の人達ばかりとか。三十代前半の女性が多いが、皆さん礼儀正しく、帰郷後はきちんと礼状を送って下さるのも嬉しい、と先生は語る。小橋君もいいファンに支えられて御同慶の至りだが、在学中「バンドを続けて一旗あげたい」と言っていた夢。平成二年の東京函商同窓会総会の際、新卒上京組十四人の一人として壇上に立った彼が「オレ歌手になりたい」と宣言して満場の拍手を浴びたことも思い出の種である。

GLAYが今年、函館市栄誉賞を歌謡界の大御所・北島三郎と一緒に贈られたことに格別の思いがする。函商OBとしては平成二年の益田キートン先輩以来のことで、改めて母校の古き良き伝統を顧みている。そしてファンが異口同音に、函館の美しい自然や温かい人情に触れ、GLAYの歌声は確かにここから生まれただんでね、と語ってくれるのを、大角先生同様に胸を熱くして聞いている。

青函ツインシティ提携十周年

平成元年に青森市と函館市がツインシティの提携を結んで今年で丁度十周年に

「公立はこだて未来大学」学生募集
道南会夏季懇親会に大学関係者から説明と援助の要請のあった「公立はこだて未来大学」は、十二月に文部省の認可を受け、四月開学を目指して入試要綱を公表して学生募集を開始した。
募集人員は総計二百四十名で、内訳は「複雑系科学科」百六十名、「情報アーキテクチャー科」八十名である。

なる。そこで青森・函館ツインシティ協議会では十周年の記念行事として、青森県立図書館、青森近代美術館の館長を務める鈴木健二NHKアナウンサーをゲストに招き記念トークを行った。



記念式典で握手する市長

記念式典は函館国際ホテルで記念トークのほか、十一月十一日を「青函ツインシティの日」に制定し、青函のますますの交流を進める日とした。また交流が続いている団体の表彰や青函両市の木・花の交換、青函アコーディオンクラブによるツインコンサートも開かれた。

記念式典ではツインシティのこれまでの足跡を振り返りながら、これからの十年の新たな交流の第一歩とすることが謳われた。

「一に体力・二に気力……」

― 早坂茂三さんの著作から ―

道南会顧問の早坂茂三氏は、ことごとくベストセラー作家としての評価が高い。既に十四冊の著作を世に送っているが、この度、十五冊目として今迄の作品の神髓を、読みやすく編集し直した「オヤジの知恵」を発刊し、好評を博している。

この著作の中に道南会の行事が取り上げられているので、早坂氏の内諾を得て紹介することとした。(田沼 記)

「一に体力、二に気力、三、四がなく
て五に頭」〜風雪の歳月を振り返って思



夏季懇親会の早坂夫妻(右二人目と左端)

うのは、一に体力、二に気力、三、四がなくて五に頭。私が何とか頑張つてこれた最大の理由は、とにかく体が丈夫だったと言うことである。道南会というミニ県人会がある。四国と九州を合わせたより広い北海道は、本場に「テッケエドウ」である。出身者が一堂に会したら東京ドームも収容できない。道南会は私の郷里・函館から出てきたジジ、ババの懇親サークルだ。月に一度、三十人ぐらいが集まつて遠足する。

平成十一年の梅雨明け前、寅さん縁の葛飾柴又帝釈天界隈を歩いた。伊藤左千夫が小説を書き、映画にもなった「野菊の墓」に足を運び、矢切りの渡しで舟で乗ろうとしたが、江戸川の増水で濁流があふれ、舟止めで渡れない。結局、一万メートル余も歩く羽目となった。汗ダクでアゴを出したのは、九十キロの巨体を持ってあます私だけである。かなり遅れて帝釈天の山門に辿り着き、八十歳を越す先輩からこもごも「大丈夫かい」と労われ赤面した。それにしても近ごろの年は寄は健脚である。解散した後、下町情緒たっぷりの店でトコロテン、冷やし汁粉を食べ、女房から「歩いて、痩せなきやねえ」と、笑われた。

風雪の歳月を振り返って思うのは、一に体力、二に気力、三、四がなくて五に頭。これが生存競争で生き残る鉄則である。逆はありえない。百獣の王ライオン



「野菊の墓を訪ねて」7月17日

会の先輩たちを見て、上には上がいると痛感した。世間は広い。

最後に笑うのは、丈夫で長持ちの人だ。お互いの一生は一回。倒れたら負けだ。最後に笑うのは丈夫で、長持ちの人である。この真理は、いつでも、どこでも変わらない。

「現代を支配する病人たち」という本によれば、ヒトラーはパーキンソン病に蝕まれ、ムツソリーニは神経梅毒の妄想に振り回され、レーニンも脳軟化症を患つて不本意にスターリンに席を譲つた。文化大革命で中国に大混乱を惹き起こした毛沢東は、老人性痴呆症であつたという。人間の知性、感性は、肉体の生理と結びついている。歴史の主人公も例外ではない。

洋の東西を問わず、政治家だけではなく、人間の一生は一回である。倒れたら負けだ。勝負あつたと、言うしかない。この世で最後に笑うのは、丈夫で長持ちの人である。この真理は、いつでも、どこでも変わらない。

私の郷里・函館の出身者で作る道南会のメンバーには七十代、八十代のじいさん、ばあさんが少なからずいる。風雪にさらされた面立ちもよく、都下・西立川の昭和記念公園で、百万本のコスモスを賞揚し、一万歩近くの散策に疲れを見せず嫌いだつたからである。しかし、道南

ああドラが鳴る

熱き思い出の青函連絡船

松前会長 弦巻鋼男

汽笛がボオーボオーと街の中に響き渡り、ドラが鳴り「蛍の光」のメロディが流れる。われわれ青函連絡船に乗ったことのある者には記憶の底に深く刻み込まれた情景であった。

別れを惜しむ人、手を振り合ってテープの見えなくなるまで、デッキを去らない人。そこには様々な人生ドラマが展開されていた。

本州から北の大地に一攫千金の夢を抱いて、道産子は青雲の志に燃えて、悲喜交々の人生模様がドラの音とともに海峽にこたえました。

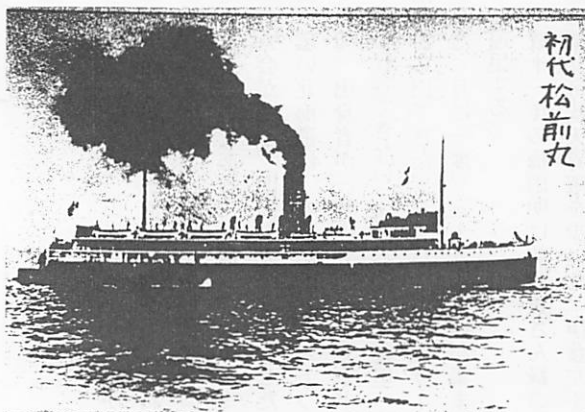
石川啄木の歌や辻仁成の小説の舞台となり、飢餓海峽の映画となり、海峽の冬景色は演歌の最高の舞台となり、津軽三味線のジョンガラ節が波間から聞こえて来る、そんな海峽を往還した。

此等の数多くのドラマの舞台となった青函連絡船は、昭和六十三年三月三十一日をもって、静かに視界から消え去った。

思い出の船名を辿ってゆけば、初期の田村丸・比羅夫丸の次世代の船名に我々は愛着を持っている。

◇思い出の船名

「津軽丸」連絡船近代化の第一号、乗客



▲初代 松前丸 ▼二代目 松前丸



「摩周丸」神秘の湖を思わせる青みがかった船体が美しかった。

「羊蹄丸」北への旅人を誘う幻想的な名、今は東京湾に繋留されている。

「十和田丸」連絡船近代化のラストバットーとして登場、旅人には最も大きく見え、青函航路のクイーンと呼ばれた。

「空知丸」函館ドック製造第二号。貨物列車を積載航走する貨物船として最後まで残された。

「渡島丸」函館ドック第三号「日高丸」とともに貨車航走船で終わった。

「檜山丸」定員六五〇名、旅客と貨車航走兼用船

「石狩丸」定員六五〇名、旅客と貨車航

走兼用で、「檜山丸」と共に三十九年に就航、五十七年に改装され最後まで青函航路を飾った。

津軽丸、松前丸は五十七年に、十勝丸、日高丸、渡島丸は五十九年に就航した。

◇悲劇の連絡船

「洞爺丸」定員九三二名。昭和二十九年九月二十六日、時速百キロで北上した台風十五号により函館湾付近の連絡船十隻は、断片的情報の中で大混乱の極にあった。その直前出航した当時国鉄が誇る最優秀連絡船、洞爺丸は引き返ししながら転覆、乗客と乗組員一一五〇人の命が怒涛の中に消えた。

この日、第十一青函丸は旅客を乗せて出航したが、すぐ引き返して客を下船させた。洞爺丸の他、第一青函丸九十名、日高丸七十名、北見丸五十九名、十勝丸五十六名の乗組員も激浪に呑まれた。世界最大の海難事故であった。

因に「青函丸」は文字通り戦前から青函航路の貨物専用のタービン船で第一から第十一までであった。

私は以前から松前丸の写真を探していたが、最近友人の函館の写真研究家、木村武廣氏より初代と二代目の松前丸の写真を手に入れることができたので、他の連絡船も含め思い出を纏めて見た。

―立いて見送る連絡船に―

情け知らずのドラが鳴る―

ふるさと大使の活動

道南会副会長 田 沼 修 二

「ふるさと大使」の制度は平成五年頃から自然発生的に各地で誕生し、現在二十八の県、三十四の都市、二十九の町村二十八の団体が大使制度をもっている。

勿論この制度は各地方自治体や団体が任意に運用しているもので、法律によって定められているものではない。大使の数は各自自治体や団体の千差万別ではあるが全体でおよそ一万余前後と推定される。名称も「はこだて観光大使」のように、はつきりと性格を規定しているものから

「銀河系いわて大使(岩手)」「紀の国大使(和歌山)」「はがくれ大使(佐賀県)」など様々である。

「はこだて観光大使」は平成九年に発足、当初九十七名が委嘱され、その後追加され現在百二十一名を数えている。この中には道南会の山下名誉会長、室谷会長、各副会長、役員、顧問の方等十数名が名を連ねている。ふるさと大使の活動は様々であるが、はこだて観光大使は市の作った美しい名刺を活用して観光函館を印象付け話題のきつかけにする。あるいは名刺の裏面に函館のPRと共にロープウェイや五稜郭タワーの半額券が刷られていて相手に喜ばれるなどの工夫がこらされている。

大使はどんな活動をすべきか、同じ悩

みをもつ大使の間で、平成八年八月から「全国ふるさと大使連絡会」が作られて毎月一回、活動報告や体験交流等の勉強会を開き機関誌も発行している。連絡会には、田沼・川守田大使がメンバーとして参加している。

今春、活動の一環として室谷会長の幹旋で、松戸市の観光大使とはこだて観光大使の交流会を開き、その模様を機関誌「ふるさと大使かわら版」に掲載したので、ご参考までに転載する。

悲劇のプリンス徳川昭武

函館市が観光振興のため「はこだて観光大使」の制度を作ってから四年経ち、

関東を中心に百二十余名の大使が委嘱されている。全国各地に約一万名の「ふるさと大使」が自治体等から委嘱されているが、その活躍は今のところ、あまり際立ったものはないように見える。

そこで観光大使の活動を活性化する試みとして、三月二十七日(土)「はこだて観光大使」と「松戸観光大使」の交流会を開いた。これは道南会長で「はこだて観光大使」の室谷さんの発案によるもので、松戸から十名、函館から室谷さんや二上さん等八名の大使と双方の事務局が顔を合わせた。場所は昨年、道南会が見学した慶喜の弟の徳川昭武が建てて住んだ松戸市の「戸定邸」である。

函館と松戸では立地条件も歴史も観光資源もかけ離れている。そこで両者を結びぶものはないかと探した結果「戸定邸」

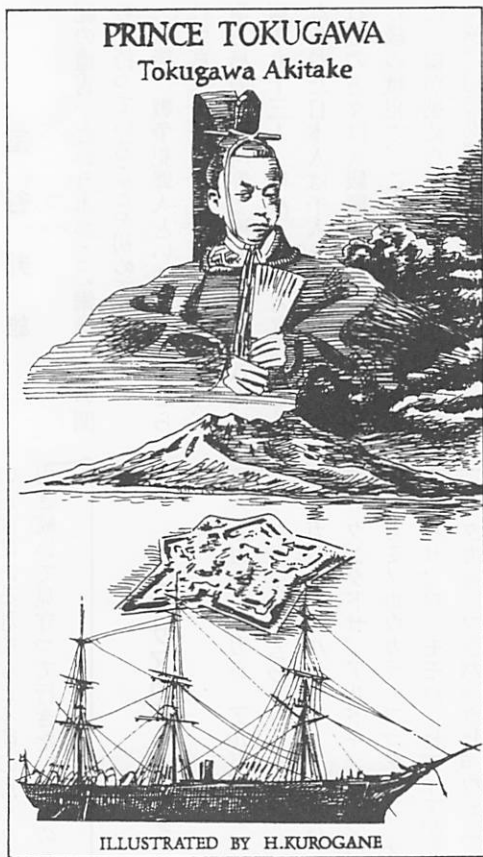
を建てた徳川昭武を研究している、戸定歴史館学芸員の斎藤洋一氏から興味深い話を聞くことができた。

一八六七年のパリ万博に十五才の昭武は將軍の名代として派遣され、ナポレオン三世や各国使節と交歓するなど使命を果たしたが、幕府自体の命運があやうくなり一八六八年幕府崩壊直後に帰国して十六才で水戸藩主になった。

明治政府に対抗して北海道に共和国を創ろうと志した旧幕臣の榎本武揚等は、その総督に昭武を推そうとしたが、逆に明治政府は水戸藩に北海道討伐を命じ、昭武の立場は苦しいものとなった。戊辰戦争最後の決戦で箱館の五稜郭が開城し昭武は辛うじて箱館に向わずに済んだ。

戊辰戦争が終わり明治新政府が発足し、廃藩置県によって幕藩体制は幕を閉じ、大名の座を降りた昭武は再度パリに留学し、帰国して松戸に居を定めた。

五稜郭戦争を巡って運命を翻弄された徳川昭武の足跡を辿る中から、松戸と函館の関係が浮かんで来た。この事実をどのように活用して「ふるさと観光」の振興に結びつけるかは、両市の観光大使の手腕に任せられることになる。



昭武・五稜郭・開陽丸

東京駅前の銅像

室 谷 邦 雄

東京駅の「丸ノ内」側正面中央に二つの銅像が立っている。一つは日本の鉄道の創始者となった井上勝の銅像であり、今一つは何の銅像が見ただけでは全く判らない。形は両手を高く上げた青年の等身大の裸の像で台座には「愛」の漢字と、愛を意味する「アガペー」と読むギリシヤ文字が刻まれているだけである。昔は「白菊遺族会（戦犯者遺族の会）」の方々が、当番で清掃奉仕をされていたそうであるが、現在は東京駅の管理下にあるという。

私はこの銅像の造られた経緯を知りたいと思ひ、色々調査をして見た。その結果意外なことが判明した。

私はテニス仲間の玉井幸男さん（海軍機関学校四十七期生・八十三歳）から、最近頂いた「我もまた祖国を愛す」（平成三年九月発行、東海千尋著・非売品）を読んで、昭和二十八年に刊行された「世

紀の遺書」という本がこの銅像に深い関りを持っていることを初めて知った。

戦後、戦争犯罪人という汚名を着せられ東京巣鴨拘留所や中国、仏印、蘭印、南方島の刑務所等で刑死した九百八人、病死九十三人、自決三十五人など、亡くなられた日本人は千人を超えている。これらの方々はA級戦犯以外の大多数はB級C級の戦犯で、この本には彼等の遺書七〇一編が納められている。そして全編悉く胸に迫る悲痛な言葉で綴られている。

この人々が刑死の直前まで、便箋、包装紙、トイレットペーパー、書物の余白などにペンや墨あるいは血で書き綴ったものを一冊に纏めあげたのがこの「世紀の遺書」であった。編集は「スガモブリズン内スガモ遺書編集会」となっているが、おそらく死刑執行前の人と禁固刑の有志数人が拘留所の中で編集作業に当たったのであろう。彼等の姓名は遺志によって全く伏せられている。

この本は昭和二十八年発行、一年間に第四版まで続刊され、予想外の剰余金が計上され、その資金で造られたのがこの銅像である。建立者の名前も建立の経緯も刻まれなかったのは、彼等にとって忍び得ない戦争犯罪人という字句を後世まで刻み残したくなかったからであろう。

台座に「愛」とのみきざまれている



の正面にある理由など不明の点もあり、にも、お心当たりのある方は、是非室谷引き続いて見守って行きたい。そのため、までお知らせ頂きたい。

「バサマカラ キイダ ムガシバナシ」 ソウマ マサキ

ムガシ ムガシ アルドゴロニ ジサマド バサマガ イタンダドサ。
ジサマハ ムツタリ ヤマサ シバカリニイグンデ、ナガナガ ユルグネ
ガツタシ、バサマモ タライバ タナイデ カワサ、センタクニ イツテイ
タンダドサ。アルドギ、バサマガ カワデセンダグシテイダツキヤ、カワノ
カミノホウカラ コツタラニ オツキイモモガ ナガレテキタンダド。
バサマワ モモバ ヒロイアゲルベド オモツタドモ、アンマリ オモガツ
タカラ ファンバツタヒヨウシニ イツパツ「ブーッ」ト「ヘ」コイデシマッ
タンダドサ。アタリニダレモイナガツタドオモツタキヤ、ヤマデコレバキイ
ダジサマワ ヤダラニオツキイオドガシタンデ タマゲテシマツテ、「シバ」
バカラネデ 「クサ」カツタンダドサ。ハンカクサクテ ドモナネハナシワ
コレデオシマイ。

「お婆さんから聞いた昔話」 相馬正樹

むかしむかし、ある所に爺さんと婆さんがおりました。爺さんはいつも山に
芝刈りに行くのでなかなか大変だったし、婆さんも盥を持って川に洗濯に出
かけていました。あるとき婆さんが川で洗濯をしていたら、川上からこんな
に大きなモモが流れてきたんだそう。婆さんはモモを拾上げようと思つた
けれども、あんまり重かったので踏張った拍子に一発「ブー」と屁をしてし
まったんだとさ。周囲に誰もいなかったから良かったと思つたら、山でこれ
を聞いた爺さんは、あまり大きい音がしたので驚いてしまつて、芝を刈らず
に草を刈ったんだとさ。馬鹿らしくてどうにもならない話はこれで終わり。

一回しか歌われない歌

道南会顧問 相馬正樹

姿勢のまま答礼し続けるのだから大変な勞働である。

同窓会だより

(年度後半分)

一、開けゆく十一州

波荒き島の果てまで

おお燦(さん)たり御稜威(オオミイツ)

いざやいざ

迎えまつらん 道民われら

二 秋深き十一州

菊の香の薫るがなかに

おお冠(かん)たり大御旗(オオミハタ)

いざやいざ

仰ぎまつらん 道民われら

突然こんな歌を思い出した。顧みれば昭和十二年、北海道で陸軍の大演習があった時の天皇陛下をお迎えする奉迎歌である。この大がつく演習は天皇が指揮される演習に限ってつけられる名称で、それ以外の演習につけられることはない。

この日、昭和十二年十月二十日、我等北海道ならびに青森、岩手の中等学校生徒ならびに女子奉迎部隊約一万人は、朝八時から柏野練兵場に集合し、分列行進の予行を重ねて午後二時に到着する天皇陛下をお待ち申し上げていた。

その時期に巡り合わせた人しか知らない歌である。幸いにも昭和天皇の閲兵分列行進の機会にめぐまれた私たちの世代だけが経験できたことである。三番以下もあつたと思うが、全く記憶がないので割愛させて頂く。その後も歌われることのない、類いまれなるこの奉迎歌を、史実と共に函館出身者の次の世代に語り継いでおくことにする。

函館弁(その三)

川守田 孝平

「か行」
かい がい

(問いかけ)
(好きかい、好きかい)
キヤベツ

かいすき

かがる

かがつてく

かじる

かたぐ

かたて

かてる

かつける

がつちやき

弱る
相手にかがつていく
かみつく(犬が嘔る)
かみつく
(仲間に入る)
(仲間に入れて)
(仲間に)入れる
他人のせいにする

かつちやく

かつば

かづばがえす

かねば

かます

かまどがえし

かまねで

からくちきく

からつぽねやみ

かんば

がんば

ひつかく

ひつくり

ひつくりかえす

食べなければ

かきませる

倒産

かまわないで

放つおくて

口こたえする

不精者 骨惜しみ

干場(昆布や魚を)

頭部の出来物

「き」
きかない

きつき

きつくりせんき

きつくり

きつたぎる

きつともつて

きばつて

きみ

きもやぐ

きもやげる

きりきりつとした

きんから石

強い

じやんけん

ぎつくり腰

しやつくり

切る

きつとそうだろう

がんばつて

とうもろこし

腹を立てる

腹が立つて

むしゃくしやする

リリしげな様子

光沢のある小石

頭におできの
出来ている人

◆東京幸小学校同窓会

九月十八日(土)

飯田橋大神宮会館

参加者 四十九名

◆東京弥生会

十月二十二日(金) 午後六時

三越特別食堂

参加者 三十名

◆白楊ヶ丘同窓会(函中・中部)

十月二十二日(金) 午後六時

九段会館

参加者 百八十名

◆東京青柳会

十一月五日(土) 午後六時

青山ダイヤモンドホール

参加者 六十名

◆遺愛同窓会

十二月三日(金)

アイビーホール青学会館

参加者 百九十四名

☆大学設立のための寄付募集☆

「公立はこだて未来大学」設立のための地元からの寄付を募集する「公立大学函館・道南圏設置促進協議会」は、十億円目標を掲げて活動をはじめている。

道南会としても、これを応援するため会員有志に協力を呼び掛けている。一口三千円以上で、詳しいことは田沼副会長か川守田幹事まで連絡のこと。

道南会行事報告

平成十一年度後半の行事報告です。

☆「夏季懇親会」

八月二十一日(土) 午後一時開会

お茶の水「聚楽」に約九十名が出席。

室谷会長の挨拶と菊池函館市東京事務所長の祝辞のあと「公立はこだて大学」について関係者から説明があった。

弦巻松前会長の音頭で乾杯から懇親会に移って話に華が咲き、最後に新入会員十名の紹介があつて午後三時半散会。

☆「昭和記念公園コスモス鑑賞会」

九月二十五日(土) 午前十一時

西立川駅に集合した三十五名の会員は広い公園をゆっくり散策し、早めに昼食を済ませて百万本というコスモスの群生を鑑賞した。今年の夏の暑さで花の生育

道南会新年総会

平成十二年の新年総会を次の通り開催します。今年の会場は昨年同様日

比谷公会堂向かいの「日本プレスセンタービル」です。(地図同封)

一、一月二十二日(土) 午後一時

二、場所 プレスセンタービル十階ホール

三、会費 八〇〇〇円

四、恒例の挨拶、祝辞、業務報告、賀詞交換のあと福引きもあります。

同封の返信葉書の投函をお忘れなく。



が早すぎたとかで、花の終わったコスモスも目についた。

厳しい残暑の中を歩き回り、洒落たレストランの冷たい飲み物で一息ついてから三時に帰路についた。

☆「葛西臨海公園」見学会

十月二十三日、会員三十名で葛西臨海公園を訪ねた。京葉線の駅からすぐ公園

の緩い坂道を登って総ガラス張りの展望台に入る。東京湾が目の前に広がる規模の大きい景観を楽しみ水族館に向かう。

この水族館の目玉は、ガラス越しに回遊する体長二メートルを越す鮪の群れで、子供も我々大人も圧倒されて見続ける。

この他、世界中の海から取り寄せた多種

類の魚や海の生物が、海城毎に整理展示されていて見飽きない。残暑の厳しい日であつたが館内は適温に保たれ快適な見学会であつた。

☆「三溪園の紅葉を訪ねる」

十一月二十七日(土) 午前十一時

横浜本牧の近くにあつて名園の誉れの高い「三溪園」を訪ねた。この庭園は明治の横浜の豪商・原富太郎氏が美の粋を集めて日本庭園を作り、その中に由緒ある建築物を移築して明治三十九年から公開したものである。



爽やかに晴上がった庭園の木々は紅葉の真盛りで、特に銀杏の黄葉に目を奪われる思いであつた。カメラを手に三三五五園内を逍遙して、外苑の池の畔で昼食を取り、外苑を散策して三時過ぎ散会。



☆「歳末築地市場視察」

十二月二十二日午前(水) 九時、築地の西本願寺前に二十五名の会員が集まり

道南会の恒例になつた築地市場の視察とお正月用品の買出を行なつた。今年は年の瀬に近い日のせいで混雑も一入であつたが、函館出身で鮪専門店を営む小幡さんご好意で、鮪を格安で買つたり鮪の握りを求めた会員が多かつた。各自で場内の店を回つて自由解散とした。